

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 20 日現在

機関番号：34525

研究種目：若手研究B

研究期間：2008～2011

課題番号：20730517

研究課題名（和文）

ペスタロッチーにおける教育と福祉の原理的融合に関する基礎研究

研究課題名（英文）

Fusion of the principle of welfare, and the educational principle in Pestalozzi

研究代表者

光田 尚美 (MITSUDA NAOMI)

関西福祉大学・社会福祉学部・講師

研究者番号：90412098

研究成果の概要（和文）：本研究では、ペスタロッチーの教育実践の意義を歴史的な文脈に照らして評価することを試みた。18世紀スイスの児童福祉施策に関する資料をもとに、貧民の生活から導かれた着想の特異性を明らかにするとともに、それが初等教育の原理に組み込まれることから、彼の実践に教育と福祉の融合モデルが存在することを指摘した。また、福祉哲学の知見を借り、彼の人間理解を支える思考の枠組みが社会福祉の動機に通底することを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this study, it was tried to evaluate the significance of Pestalozzi's educational practice by placing it for historic context. At first, the specificity of his idea that he got from the life with the poor was clarified by referring to a document of child welfare policy in Swiss in 18<sup>th</sup> century. And based on that his idea was incorporated in the principle of the elementary education, it was pointed out that there is the Model of fusion of welfare and education in Pestalozzi. Finally it was also clarified that a framework that he understands human being is common to a motive of the social welfare by referring to knowledge of the welfare philosophy.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	0	0	0
2009年度	400,000	120,000	520,000
2010年度	300,000	90,000	390,000
2011年度	100,000	30,000	130,000
年度			
総計	800,000	240,000	1,040,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育思想・学説

## 1. 研究開始当初の背景

筆者は、以下の問題関心（背景）に拠りつつ、2に示す研究目的を設定した。

問題関心の一つは、ペスタロッチー研究の諸成果を整理・再考し、新たな研究の視点を提示することである。ペスタロッチー研究は

それ自体において長い歴史を有している。その動向は、1996年のペスタロッチー生誕250年祭が注目される。そこで提起された、エルカースらの批判的検討の立場と、シュタドラーの資料考証の立場とが、それ以降のペスタロッチー研究の主要な流れとなっている（鈴

木、2007)。

こうした研究の積み上げによって、新たな研究の方向性が提示される一方で、いまだ解決が留保されている、あるいは問題提起に留まっている課題もある。それは、(1)時代の政治的関心とペスタロッチーの教育思想との連関を明らかにすること、(2)ペスタロッチーの思索や活動の成果を現代の教育問題に再定位して読み解いていくことである (Klafki, 1971)。

(1)において強調されるのは、文化的・歴史的文脈に位置づけながら彼の教育思想を再評価することである。多くの思想研究がこうした時代の制約を視野に含めているが、その思想に連なる時代精神を理解することに資する考証は、文化圏の異なる研究者にとって困難といわざるをえない。したがってわが国の先行研究においては、批判的に検討するまでには至っていない現状がある。

(2)は、教育学における思想研究の意義を問いかけている。教育学が教育の理論と実践を媒介する実践者に資する学問であるならば、それは教育の諸現象についての実証的研究のみならず、その実践を支える普遍的な原理を提供することが求められよう (小笠原、1985)。2006年の日本ペスタロッチー・フレーベル学会のシンポジウムにおいても、現代の教育問題に対する本質的解決の視点を提供することの必要性が提案されたように (福田、渡邊、2006)、教育思想研究はこうした役割を担っているといえる。

しかし、普遍的価値や原理の追究もまた、文化的・歴史的文脈に位置づけての価値の枠組みが示されてはじめて論証されるだろう。そこで本研究は、18世紀ヨーロッパ、主としてペスタロッチーの生きた時代のスイスの福祉政策に焦点をしばり、シュタドラーに代表される緻密な資料のほか、国内外におけるスイス史文献資料を整理する。そしてこうした諸制度・政策を中心に、当時の政治的関心をあらかず福祉の問題と彼の教育思想との連関を探ることを通して、これまでのペスタロッチー像を再検討し、残された課題にこたえていきたいと考える。

#### 【参考文献】

- ・ Wolfgang Klafki, *Pestalozzi über seine Anstalt in Stans. Mit einer Interpretation*, Weinheim und Basel, 1971.
- ・ 小笠原道雄編『教育学における理論＝実践問題』学文社、1985年。
- ・ Peter Stadler, *Pestalozzi*, Zürich, 1993.
- ・ Jurgen Oelkersm Fritz Osterwalder (Hrsg.), *Pestalozzi-Umfeld und Rezeption*, Weinheim und Basel, 1995.
- ・ シンポジウム「ペスタロッチー・フレーベルと現代」(福田弘、渡邊満)『人間教育の探

究』第19号、2007年。

・ シンポジウム「ペスタロッチー・フレーベル研究の現状と課題」(鈴木由美子「ペスタロッチー研究者の立場から」日本ペスタロッチー・フレーベル学会第25回大会発表要旨収録、17～18頁、2007年。

## 2. 研究の目的

本研究では、18世紀スイスの社会福祉の問題とペスタロッチーの教育思想との連関を分析し、彼の思索と活動を文化的・歴史的文脈に照らして評価するとともに、そこに教育と福祉の原理的な融合モデルが存在することを指摘し、人間生成の包括的な教育の概念を提示することを試みる。

本研究が当該分野において有する独自の点およびその意義は、以下の2点に集約される。

### (1)時代考証にもとづくペスタロッチー教育思想の再評価

本研究では、分析の鍵として18世紀スイスの社会福祉と文教政策の関連性や、こうした時代の関心に対するペスタロッチーのアプローチについて解明していく。かかる視点は先行研究においても十分に検討されておらず、本研究の独自性を示すものとなる。

### (2)教育と福祉にまたがる原理的研究

教育と福祉は人間の生に深く関わる営為である点において親和性を有している。にもかかわらず、教育学研究における福祉は、教育の抽象化された目的概念と見なされるか、あるいは児童保護や養育と言った教育の一形式に留められる。翻って、社会福祉学研究における教育もまた、そのサービス体系の一形態に位置づけられている。

教育家として著名なペスタロッチーは、社会福祉の思想や実践にも影響を与えた人物である。彼の思索と活動を、教育と福祉の融合という視点から再検討することによって、人間生成の全体を包括する原理が導かれ、教育と福祉の融合モデルが示されうるのではないかと考える。それは、教育学研究のみならず社会福祉学研究においても有意義な試みであろう。またこの試みは、教育学においても児童保護や救済などとして一面的に規定されていた福祉理解に対し、その捉え直しを迫るとともに、社会福祉学、とりわけ児童福祉にかかわる理念的研究と教育学研究との接合点を示すことも期待されるであろう。

## 3. 研究の方法

本研究は、文献資料の収集・整理・検討、さらにその成果の発表を中心とした。検討すべき資料が多岐にわたっているため、その収集・整理に必要な日数を含め、3年で行った。

2009(平成21)年度は、ペスタロッチーに

関する先行研究、18世紀スイスの社会福祉および文教政策に関する資料のほか、研究目的の理論的根拠をより明確にするため、主として社会福祉学、社会福祉史（思想史）、児童福祉に関連する理念的研究の成果を、国内外にわたり収集した。

収集した資料は逐次確認し、分析・検討を行った。成果は、学内の紀要にて公表した。

2010（平成21）年度は、資料収集のための海外出張（スイス：チューリヒ）を9月に行った。校務との兼ね合いから、期間は1週間とした。スイス史や18世紀の社会福祉政策および文教政策、法令などの資料については、主としてZürichzentralbibliothekにて収集したが、各地方の貧民政策、孤児救済に関連する資料、18世紀後半から19世紀前半に出版された古書・資料などは、Pestalozzianum Forschungsbibliothekを訪問し、当館の職員の協力を得て収集した。

帰国後は資料を整理し、逐次分析・検討を行った。研究成果は、研究代表者の所属する研究会での口頭発表、および学内紀要における論文によって公表した。

2011（平成22）年度は、これまでの資料の分析・検討を継続して行くとともに、学内の研究会（社会福祉学部研究会）および研究代表者の所属する研究学会、全国学会、地方の教育学会にて成果を公表した。また、学内紀要、学会紀要にも論文を掲載した。

年度末には、これまでの研究成果を冊子にまとめて印刷し、関係者に配付した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 教育と福祉の人間学—ペスタロッチー教育思想に見る人間生成へのアプローチ—

ペスタロッチーが思索を練り、執筆活動に専念した約10年間に著された論考と、彼の哲学的名著と評される『探究』、さらにこれら思索を基盤として展開された孤児救済の実践に見る人間理解を手がかりに、彼に固有の人間発達の原理が、他者との互惠の関係に基づく「自己実現」を志向していることを改めて確認し、かかる論理が社会福祉の動機にも通底することを指摘した。

考察の結果、ペスタロッチーの人間理解には、後の実存主義的教育学に象徴的な思想が萌芽的にあらわれていることが示された。しかしながら、教育家ペスタロッチーの名を一躍世に知らしめることとなった「メトデー（die Methode）」が、認識の連続的、段階的な発展を軸としていることから、例えば心情陶冶（Herzzerziehung）に表れるような非連続的発展の描写に対する評価はこれまで正當になされてこなかったといえる。

一方、福祉哲学の研究者らは、社会福祉の価値や動機が探究している。そのなかで、生活世界と非暴力の思想の統合化によって福

祉哲学を構築するという試論を展開した加藤は、社会福祉に関わろうとする者の動機について言及している。そして、「社会権的生存権」を普遍的に保障するという「正義」と「連帯」の思想があることを指摘したうえで、さらにその権利の根底に、『苦しんでいる人たちに対して、安定し余裕のある有能な人が援助をしてあげる』という自己満足的欲求ではなく、『苦しんでいる人から自己実現の相互性（reciprocation）を教わるという意志』

（加藤、2008、p. iii）があるのではないかと問うている。「教わる」といっても、苦しんでいる人は「悟った人」ではない。しかしその苦しんでいることこそが、人生で最も「実存に真向かう」瞬間である。われわれは受苦を通して自己実現に向かい、新しい人格の発展へと自己を開いていく。こうした論理が、社会福祉の動機に存在するというのである。

ペスタロッチーは人格の発展の様式を、自己自身の「内的醇化（innere Veredelung）」の過程として描き出している。そして、それによって新たに生成される自己像を「道徳的自立（sittliche Selbständigkeit）」と呼ぶ。

この自己生成の過程は、決して孤独な道りではない。ペスタロッチーは常に、そこに他者との関係性を意識している。その証左を、われわれは「道徳的自立」が動物的な「好意（Wohlwollen）」から真性の「愛（Liebe）」へと「醇化」するという彼の主張に見ることができる。すなわち、「道徳的自立」とは、他者への配慮が企てられ、「他者の幸福に奉仕しようとする」（森川、1993）こと、すなわち「愛する主体」として完成することに他ならない。そして、こうした自己生成の可能性を現実に示したものが、シュタンツ孤児院の教育実験である。

教育と福祉は、人間の在り方や生き方に深く関わる営みであり、その実践においては共に「主体」の位置や意味が問われる。本研究は、この二つの営みの根底には共通する自己生成の原理が存在するのではないかと、その意味において、教育をサービスの一形態として捉える見方や、福祉を生活支援に限定して理解することは、それぞれの機能を矮小化してしまうことになりはしないか、という問いを投げかけるものとなっている。

##### (2) 18世紀スイスの児童福祉施策におけるペスタロッチーの思索と活動の位置づけ

###### ① 18世紀スイスの児童福祉施策

近代チューリヒの児童福祉施策の歴史をまとめた文献、スイス史研究における社会福祉関連の資料、および当時の孤児院についてのペスタロッチーの記述などをもとに、18世紀スイスの児童福祉施策を、チューリヒに誕生した公的孤児院の変遷を中心にまとめた。

スイスにおいて、「貧困」問題を端緒とす

る社会福祉施策の論議において、児童福祉に焦点が当てられるようになってきたのは、17世紀になってである。クレスポによれば、チューリヒにおいて、路地をうろつく子どもらの処遇を求める請願が議会出されたのが16世紀後半であったが、その解決が急務とも意識されるようになったのは、30年戦争後、避難民が急増したためであった（Crespo, 2001, S. 62.）。

17世紀後半からの児童福祉施策の論点は、公的な児童福祉施設を設置し、孤児らの扶養にかかる費用負担を軽減すること、彼らを実直な手工業者へと養成すること、里親に利用され尽くしている孤児らを救済すること、加えて、物乞いを取り締まることであった。こうした声に応え、1637年、チューリヒでは児童福祉公的施設が、刑務所施設を兼ねた孤児院という形で誕生した。

孤児院開設をめぐる決議では、孤児らが囚人と一緒に収容されることの妥当性が示されたが、次第に、囚人との接触が孤児らに不適切な影響を及ぼすことが指摘されるようになった。さらに、孤児院の生活環境の劣悪さ（保健・衛生の問題や宗教的教化、教育の問題など）が注目され始めた。こうして、刑務所との分離を含む公的孤児院の改革が進められたが、一方で、収容すべき孤児らの増加という問題から、受け容れは一般市民の子どもに限定するなど、収容に係る条件が厳しく設定されるようになった。

18世紀から19世紀の前半にかけて、この収容条件の網からこぼれ出た子ども、すなわち、貧困家庭の子どもらを広く受け容れるような貧民学校や孤児院が現われ始めた。それらは、保護や救済の対象を限定していく公的施設とは対照的に、子どもの貧困や物乞いの問題を根本的に克服するための、それゆえ子どもの発達段階をいよいよ考慮し、その境遇や生活環境に基づいて方針を定めるところの新しい施設教育（Heimerziehung）の在り方を示すものであった。

ペスタロッチーの試みもまた、こうした施設教育の展開の一つ、さらに言えば、そのなかで最も大きな影響力を有する実践の一つに位置づけられる。

## ②ペスタロッチーが見つめた時代的課題

私立の貧民学校の一形態として位置づけられるペスタロッチーの実践が、なにゆえに大きな影響力を持つにいったのか。その理由の一つを彼の実践の特異性に求め、まずはその根底にある、時代の課題に対する彼の着眼に焦点を当て考察した。『ノイホーフだより』の貧民学校児童、『リーンハルトとゲルトルート』の地方農村の社会的貧困、『シュタンツだより』のシュタンツの孤児・貧児らの描写を中心に、1800年代スイス地方の貧困

や孤児の実態に関する資料に照らしながら分析した。

「貧困」に象徴される困窮にある人間（子ども）を観察したペスタロッチーは、そこに人間本性の脆弱さがあると見ている。もちろん、出自や階層などの抗い難い境遇という事情もあるが、産業革命の波のなかで、多くの貧困者が生み出されるという事態（社会的貧困）が発生していた。ペスタロッチーは、実りはわずかであっても父祖の土地を守り、堅実に生きてきた地方農民らが、贅沢に慣れ親しみ、財を失い、やがて牧師の喜捨や物乞いにすがるようになっていく姿を目の当たりにしたのである。

こうした深刻な事態ことは、子どもの世界にも及んでいた。戦災孤児として知られるシュタンツ孤児院の子どもたちであるが、彼らのすべてが「孤児」であったわけではない。疥癬やできもので皮膚はただれ、ダニやシラミのたかったぼろ服をまとい、栄養失調で骸骨のような姿になったのは、戦禍に見舞われたためだけとは限らなかったのである。その証拠に、ペスタロッチーは、多くの子どもたちが日曜日になると物乞いを当てにした親元へと連れ戻されたことを報告している。シュタンツの事例は、戦災孤児の保護や救済の事業としてではなく、社会的貧困における児童福祉施策の一つとして評価していく必要があるだろう。

## (3)ペスタロッチーの貧児・孤児救済の特色

子どもたちの抱えている問題に対して、ペスタロッチーはどのようにアプローチしていったのか。そこに研究代表者は、狭義の「教育」や「人間形成」の概念では捉えきれない、人間の尊厳や自立に向けた、いわば福祉的な働きかけの必要性を見ている。ペスタロッチーが、貧児や孤児の教育として語り、実践したもののなかに、教育と福祉の機能が不可分に存在しているのではないか。それはいかなる実践に求められるのか。ペスタロッチーの貧児・孤児教育の実践を中心に、彼自身の描写、当時の児童福祉施策の担い手らの評価などを参照しながら、その手がかりを探った。

結果、その後の施設教育の教育学の構想へと継承されたとされる、「家庭的精神」による施設融合の原理と生活教育の原理に着目した。もちろん、これらの原理はペスタロッチーの教育論をよりよく示すものとしてこれまでも取り上げられ、その意義が検証されてきた。しかし本研究およびそれに続く研究では、それを「子どもたちの抱える苦悩を真正面から捉え、その人間形成の困難さに立ち向かう教育論」として再構成したいと考えている（今後の展望を参照）。

また、ペスタロッチーがなぜ貧児や孤児の教育にこだわったのかという問いにも応え

ようと試みた。その端緒として、ペスタロッチャーの貧児・孤児教育をめぐる思想形成の特徴を 18 世紀スイスの私立孤児院創設に影響を与えた敬虔主義との対比に焦点を当てて整理した。

#### (4) 今後の展望

ペスタロッチャーの貧児・孤児教育の特色を、「家庭的精神」による施設融合の原理と生活教育にあることを指摘したが、そこに「子どもたちの人間形成の困難さに立ち向かう教育論」が存在することを精緻に検証していくことが、今後の課題である。

##### ①「施設教育」における「居間 (Wohnstube)」の創造—貧困と heimatlos の問題—

ノイホーフの実践に下敷きに著されたといわれる『隠者の夕暮』のなかで、ペスタロッチャーは乳呑児と母親との関係を、子どもの生活圏の中心に据えている。そしてその原理は、ブルクドルフやイヴェルドンの学園において、家庭における「居間」を模倣するという原理として継承された。そこで彼は、子どもたちを 10 名以下のグループに分け、各グループに一人の教師を配置し、寄宿舎での寝食をともにするという方式をもって、「居間」に相応しい「家庭的精神」の醸成をねらっていた。

しかし、なぜ「家庭」であり「居間」なのか。新しい時代の風のなかで、ペスタロッチャーは時代に相応しい新たな道を模索しようとしている。例えば、『リーन्हルトとゲルトルート』に登場するゲルトルートは、子どもらに、新しい産業である糸紡ぎを教える。貯蓄をし、家計をやり繰りする知識を教える。彼女は、伝統的な家庭や共同体に根づくキリスト教精神を重んじつつ、時代の波に抗うのではなく、その波に呑まれることなく生きることを教えている。それは、時代を主体的に生きる「新しい人間」像でもある。

ペスタロッチャーが彼女をして展開させたものこそ、「居間」の教育である。それは、やや発展的に解釈すれば、時代の急速な流れのなかでも根をはり、生きていく力の教育ともいえる。それゆえに、「居間」の教育の必要性は、heimatlos (故郷を喪失した) と形容されることの貧児や孤児らにとってこそ、いよいよ鮮明に感じられたのだといえまいか。そしてこのことが、学園の試みが軌道に乗っていたにもかかわらず、ペスタロッチャーの関心をしてなお貧児・孤児の教育施設に向かわせしめた、大きな理由であったと考える。そしてまた、ここにこそ、教育と福祉の原理的融合モデルの具体像が描き出されるものと確信する。後期の著作や書簡を中心に、この点を論証していくことが今後の課題である。

##### ②道徳性と「技能」の問題

①に関連して、ペスタロッチャーの貧児・孤児教育の実践のなかで、問題提起に留まっている課題がある。それは、「道徳的基礎陶冶 (sittliche Elementarbildung)」における「行為 (Handlung)」の訓練の評価である。

ペスタロッチャーは、自らの教育方法の展開のなかで、道徳性の発達には「心情陶冶 (Herzbielung)」のメトデを当てて論じている。それは『探究』で示されたように、原初的な情動の段階にある「愛」が、神に対する畏敬 (敬神のレベルの「愛」) へと「醇化」される歩みの法則を捉えたものといえるが、シュタンツ孤児院での実践では、その階梯に「行為」の訓練という段階が設けられている。すなわち、道徳的な行為を繰り返し、「技能」を身につけることが目指されるのである。そして最後に、認知の段階が設定される。

情緒が高まり、技能を身につけ、認知が発達する。これがペスタロッチャーの道徳教育の実践なのであるが、これまでの研究においては、この「技能」の意味が明確に位置づけられていなかったように思われる。なるほどクラフキーは、行為の訓練を「技能」の習得ではなく、「自己の欲求に打ち克つ」練習と評価している。しかし、行為の型を習得すること自体に、実は重要な意味があるのではない。

シュタンツの子どもらの境遇はさまざまだが、共通しているのは「怠惰であること」だと報告されている。では、なぜ「怠惰である」のか。それは、一方では甘やかされて傲慢が身につけているためであり、他方では「貧困」や、あるいはその他の「困窮」(放置や虐待、心的外傷など) のためである。

ここで考えたいのは、収容児童の大多数を占めていた後者の子どもらの問題である。彼らはこれまでの境遇において、道徳的なものを受け容れる感性も「怠惰」となっていた。さらに、道徳的に振る舞うこと (好意をどのような形であらわすのか) を学んできていなかった。ゆえに、好意や愛着を感じても、それを他者に返す術を知らないいたのである。他者を意識し、他者と上手くやっていくためにはどのようなスキルが必要かを、彼らはシュタンツで学ばなければならなかったのである。それはいわば、「～し直す」ことでもあった。

ペスタロッチャーの道徳教育は、いわば、傷ついた子どもたちが「育ち直し」あるいは「生き直し」を図ることを期した試みであると評価できよう。その観点に立ち、彼の道徳性と「技能」の理解の関連性を論証していきたい。またこの課題は、ペスタロッチャー以降の貧児・孤児教育の実践に引き継がれた生活教育の原理と、ペスタロッチャー自身が構想した「生活」の問題との相違点となるのではない

だろうか。後の施設での生活教育に関する資料などとも照らし合わせ、分析を行いたい。

#### 【参考文献】

- ・加藤博史『福祉哲学—人権・生活世界・非暴力の統合思想—』晃洋書房、2008年。
- ・森川直『ペスタロッチー教育思想の研究』福村出版、1993年。
- ・Maria Crespo : Verwalten und Erziehen. Die Entwicklung des Züricher Waisenhauses 1637-1837. Zürich. 2001.

#### (5) 研究成果の公表

学内紀要を中心に、成果を定期的に論文として発表した。その他、5に掲載するもの以外に、岡山大学大学院教育学研究科（教育哲学研究室）修了生の研究者で構成された「岡大教育哲学研究会」（2011年3月、12月）において、また、関西福祉大学社会福祉学部研究会（2011年11月）において口頭発表を行った。

5に掲載するものを含め、研究成果をまとめた冊子を2012年3月に作成し、関係各者に配付した。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- ① 光田尚美、教育と福祉の人間学—ペスタロッチーにおける「道徳的自立」の哲学を中心に—、関西福祉大学社会福祉学部研究紀要、査読有、第13号、2010、pp. 69-76.
- ② 光田尚美、ペスタロッチーの貧児・孤児救済の意義—18世紀スイスの子ども福祉の状況から—、関西福祉大学社会福祉学部研究紀要、査読有、第14巻第2号、2010、pp. 47-56.
- ③ 光田尚美、『リーन्हルトとゲルトルート』に見る社会的貧困—ペスタロッチー教育思想の前提—（研究ノート）、関西福祉大学社会福祉学部研究紀要、査読有、第15巻第1号、2011、pp. 81-86.
- ④ 光田尚美、ペスタロッチーの貧児・孤児教育をめぐって(1)、関西福祉大学社会福祉学部研究紀要、査読有、第15巻2号、2012、pp. 29-36.
- ⑤ 光田尚美、教育と福祉の原理的融合—ペスタロッチーの孤児教育を中心に—、中国四国教育学会誌（教育学研究 CD-ROM版）、第57巻、2012、pp. 592-597.

〔学会発表〕（計2件）

- ① 光田尚美、ペスタロッチーの貧児・孤児教育をめぐって—近代スイスの児童福祉施策—、日本ペスタロッチー・フレー

ベル学会第29回大会、2011年9月10日、常盤会学園大学

- ② 光田尚美、教育と福祉の原理的融合—ペスタロッチーの孤児教育を中心に—、中国四国教育学会第63回大会、2011年11月20日、広島大学

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

光田 尚美 (MITSUDA NAOMI)

関西福祉大学・社会福祉学部・講師

研究者番号：90412098